鹿踊りのはじまり

宮沢賢治

そのとき西のぎらぎらのちぢれた雲のあいだから、夕陽(ゆうひ)は赤くななめに苔(こけ)の野原に注ぎ、すすきはみんな白い火のようにゆれて光りました。わたくしが疲(つか)れてそこに睡(ねむ)りますと、ざあざあ吹(ふ)いていた風が、だんだん人のことばにきこえ、やがてそれは、いま北上(きたかみ)の山の方や、野原に行われていた鹿踊りの、ほんとうの精神を語りました。

　そこらがまだまるっきり、丈高(たけたか)い草や黒い林のままだったとき、嘉十(かじゅう)はおじいさんたちと北上川の東から移ってきて、小さな畑を開いて、粟(あわ)や稗(ひえ)をつくっていました。

あるとき嘉十は、栗(くり)の木から落ちて、少し左の膝(ひざ)を悪くしました。そんなときみんなはいつでも、西の山の中の湯の湧(わ)くとこへ行って、小屋をかけて泊(とま)って療(なお)すのでした。

天気のいい日に、嘉十も出かけて行きました。糧(かて)と味噌(みそ)と鍋(なべ)とをしょって、もう銀いろの穂(ほ)を出したすすきの野原をすこしびっこをひきながら、ゆっくりゆっくり歩いて行ったのです。

いくつもの小流れや石原を越(こ)えて、山脈のかたちも大きくはっきりなり、山の木も一本一本、すぎごけのように見わけられるところまで来たときは、太陽はも

うよほど西に外(そ)れて、十本ばかりの青いはんのきの木立の上に、少し青ざめてぎらぎら光ってかかりました。

　嘉十は芝草(しばくさ)の上に、せなかの荷物をどっかりおろして、栃(とち)と粟とのだんごを出して喰(た)べはじめました。すすきは幾(いく)むらも幾むらも、はては野原いっぱいのように、まっ白に光って波をたてました。嘉十はだんごをたべながら、すすきの中から黒くまっすぐに立っている、はんのきの幹をじつにりっぱだとおもいました。

　ところがあんまり一生けん命あるいたあとは、どうもなんだかお腹(なか)がいっぱいのような気がするのです。そこで嘉十も、おしまいに栃の団子をとちの実のくら

い残しました。

「こいづば鹿さ呉でやべか。それ、鹿、来て喰」と嘉十はひとりごとのように言って、それをうめばちそうの白い花の下に置きました。それから荷物をまたしょって、ゆっくりゆっくり歩きだしました。

ところが少し行ったとき、嘉十はさっきのやすんだところに、手拭を忘れて来たのに気がつきましたので、急いでまた引っ返しました。あのはんのきの黒い木立がじき近くに見えていて、そこまで戻るぐらい、なんの事でもないようでした。

けれども嘉十はぴたりとたちどまってしまいました。

それはたしかに鹿のけはいがしたのです。鹿が少くても五六疋（ぴき）、湿（しめ）っぽいはなづらをずうっと延ばして、しずかに歩いているらしいのでした。

嘉十はすすきに触（ふ）れないように気を付けながら、爪立（つまだ）てをして、そっと苔を踏（ふ）んでそっちの方へ行きました。

たしかに鹿はさっきの栃の団子にやってきたのでした。

「はあ、鹿等（しかだ）あ、すぐに来たもな。」と嘉十は咽喉（のど）の中で、笑いながらつぶやきました。そしてからだをかがめて、そろりそろりと、そっちに近よって行きました。

一むらのすすきの陰（かげ）から、嘉十はちょっと顔をだして、びっくりしてまたひっ込（こ）めました。六疋ばかりの鹿が、さっきの芝原を、ぐるぐるぐるぐる環（わ）になって廻（まわ）っているのでした。嘉十はすすきの隙間（すきま）から、息をこらしてのぞきました。

太陽が、ちょうど一本のはんのきの頂（いただき）にかかっていましたので、その梢（こずえ）はあやしく青くひかり、まるで鹿の群を見おろしてじっと立っている青いいきもののようにおもわれました。すすきの穂も、一本ずつ銀いろにかがやき、鹿の毛並（けなみ）がことにその日はりっぱでした。

嘉十はよろこんで、そっと片膝をついてそれに見とれました。
鹿は大きな環をつくって、ぐるくるぐるくる廻っていましたが、よく見るとどの鹿も環のまんなかの方に気がとられているようでした。その証拠（しょうこ）には、頭も耳も眼（め）もみんなそっちへ向いて、おまけにたびたび、いかにも引っぱられるように、よろよろと二足三足、環からはなれてそっちへ寄って行きそうにするのでした。
もちろん、その環のまんなかには、さっきの嘉十の栃の団子がひとかけ置いてあったのでしたが、鹿どものしきりに気にかけているのは決して団子ではなくて、

そのとなりの草の上にくの字になって落ちている、嘉十の白い手拭らしいのでした。嘉十は痛い足をそっと手で曲げて、苔の上にきちんと座(すわ)りました。

鹿のめぐりはだんだんゆるやかになり、みんなは交(かわ)る交(がわ)る、前肢(まえあし)を一本環の中の方へ出して、今にもかけ出して行きそうにしては、びっくりしたようにまた引っ込めて、とっとっとっとっしずかに走るのでした。その足音は気もちよく野原の黒土の底の方までひびきました。それから鹿どもはまわるのをやめてみんな手拭のこちらの方に来て立ちました。

嘉十はにわかに耳がきいんと鳴りました。そしてが

たがたふるえました。鹿どもの風にゆれる草穂（くさぼ）のような気もちが、波になって伝わって来たのでした。

嘉十はほんとうにじぶんの耳を疑いました。それは鹿のことばがきこえてきたからです。

「じゃ、おれ行って見で来（こ）べが。」

「うんにゃ、危ないじゃ。も少し見でべ。」

こんなことばもきこえました。

「何時（いつ）だがの狐（きつね）みだいに口発破（くちはっぱ）などさ罹（かか）ってあ、つまらないもな、高で栃の団子などでよ。」

「そだそだ、全ぐだ。」

こんなことばも聞きました。

「生きものだがも知れないじゃい。」

「うん。生きものらしどごもあるな。」

こんなことばも聞えました。そのうちにとうとう一疋が、いかにも決心したらしく、せなかをまっすぐにして環からはなれて、まんなかの方に進み出ました。

みんなは停(とま)ってそれを見ています。

進んで行った鹿(しか)は、首をあらんかぎり延ばし、四本(しほん)の脚(あし)を引きしめ引きしめそろりそろりと手拭(てぬぐい)に近づいて行きましたが、俄(にわ)かにひどく飛びあがって、一目散に遁(に)げ戻ってきました。廻りの五疋も一ぺんにぱっと四方へちらけようとしましたが、はじめの鹿が、ぴた

りとまりましたのでやっと安心して、のそのそ戻ってその鹿の前に集まりました。

「なじょだた。なにだた、あの白い長いやづあ。」

「縦に皺(しわ)の寄ったもんだけあな。」

「そだら生ぎものだないがべ、やっぱり蕈(きのこ)などだべが。毒蕈(ぶすきのこ)だべ。」

「うんにゃ。きのごだない。やっぱり生ぎものらし。」

「そうが。生きもので皺うんと寄ってらば、年老(としよ)りだな。」

「うん年老りの番兵だ。ううはははは。」

「ふふふ青白の番兵だ。」

「ううははは、青じろ番兵だ。」
「こんどおれ行って見べが。」
「行ってみろ、大丈夫だ。」
「喰っつがないが。」
「うんにゃ、大丈夫だ。」
そこでまた一疋が、そろりそろりと進んで行きました。五疋はこちらで、ことりことりとあたまを振ってそれを見ていました。
進んで行った一疋は、たびたびもうこわくて、たまらないというように、四本の脚を集めてせなかを円くしたりそっとまたのばしたりして、そろりそろりと進

みました。

　そしてとうとう手拭のひと足こっちまで行って、あらんかぎり首を延ばしてふんふん嗅（か）いでいましたが、俄かにはねあがって遁げてきました。みんなもびくっとして一ぺんに遁げだそうとしましたが、その一ぴきがぴたりと停まりましたのでやっと安心して五つの頭をその一つの頭に集めました。

「なじょだた、なして逃げで来た。」

「噛（か）じるべとしたようだたもさ。」

「ぜんたいなにだけあ。」

「わがらないな。とにかぐ白どそれがら青ど、両方の

ぶぢだ。」

「匂(におい)あなじょだ、匂あ。」

「柳の葉みだいな匂だな。」

「はでな、息吐(いぎっ)でるが、息(いぎ)。」

「さあ、そでば、気付けないがた。」

「こんどあ、おれあ行って見べが。」

「行ってみろ」

三番目の鹿(しか)がまたそろりそろりと進みました。そのときちょっと風が吹いて手拭がちらっと動きましたので、その進んで行った鹿はびっくりして立ちどまってしまい、こっちのみんなもびくっとしました。けれど

も鹿はやっとまた気を落ちつけたらしく、またそろりそろりと進んで、とうとう手拭まで鼻さきを延ばした。

　こっちでは五疋がみんなことりことりとお互(たがい)にうなずき合って居(お)りました。そのとき俄かに進んで行った鹿が竿立(さおだ)ちになって躍(おど)りあがって遁げてきました。

「何(な)して遁げできた。」

「気味悪(きびわり)ぐなてよ。」

「息吐(いぎつ)でるが。」

「さあ、息(いぎ)の音(おど)あ為(さ)ないがけあな。口(くち)も無いようだけあな。」

「あだまあるが。」

「あだまもゆぐわがらないがったな。」

「そだらこんだおれ行って見べが。」

四番目の鹿が出て行きました。これもやっぱりびくびくものです。それでもすっかり手拭の前まで行って、いかにも思い切ったらしく、ちょっと鼻を手拭に押(お)しつけて、それから急いで引っ込めて、一目さんに帰ってきました。

「おう、柔(や)っけもんだぞ。」

「泥(どろ)のようにが。」

「うんにゃ。」

「草のようにが。」

「うんにゃ。」
「ごまざいの毛のようにが。」
「うん、あれよりあ、も少し硬（こわ）ぱしな。」
「なにだべ。」
「とにかく生ぎもんだ。」
「やっぱりそうだが。」
「うん、汗臭（あせくさ）いも。」
「おれも一遍（ひとがえり）行ってみべが。」
五番目の鹿がまたそろりそろりと進んで行きました。
この鹿はよほどおどけもののようでした。手拭の上にすっかり頭をさげて、それからいかにも不審（ふしん）だという

ように、頭をかくっと動かしましたので、こっちの五疋がはねあがって笑いました。

　向うの一疋はそこで得意になって、舌を出して手拭を一つぺろりと嘗(な)めましたが、にわかに怖(こわ)くなったとみえて、大きく口をあけて舌をぶらさげて、まるで風のように飛んで帰ってきました。みんなもひどく愕(おど)ろきました。

「じゃ、じゃ、噛(か)じらえだが、痛(いだ)ぐしたが。」

「プルルルルル。」

「舌抜(ぬ)がれだが。」

「プルルルルル。」

「なにした、なにした。なにした。じゃ。」
「ふう、ああ、舌縮(ちぢ)まってしまったたよ。」
「なじょな味だた。」
「味無いがたな。」
「生ぎもんだべが。」
「なじょだが判(わか)らない。こんどあ汝(うな)あ行ってみろ。」
「お。」
おしまいの一疋がまたそろそろ出て行きました。みんながおもしろそうに、ことこと頭を振って見ていますと、進んで行った一疋は、しばらく首をさげて手拭を嗅(か)いでいましたが、もう心配もなにもないという風

で、いきなりそれをくわえて戻(もど)ってきました。そこで
鹿はみなぴょんぴょん跳(と)びあがりました。
「おう、うまい、うまい、そいづさい取ってしめば、
あどは何(なん)っても怖(お)っかなぐない。」
「きっともて、こいづぁ大きな 蝸牛(なめくずら) の旱(ひ)からびだの
だな。」
「さあ、いいが、おれ歌(うだ)うだうはんてみんな廻(ま)れ。」
その鹿はみんなのなかにはいってうたいだし、みん
なはぐるぐるぐるぐる手拭をまわりはじめました。
「のはらのまん中の　めつけもの
すっこんすっこの　栃(とち)だんご

栃のだんごは　結構だが
となりにいからだ　ふんながす
青じろ番兵は　気にかがる。
青じろ番兵は　ふんにゃふにゃ
吠えるもさないば　泣ぐもさない
瘠せで長くて　ぶぢぶぢで
どごが口だが　あだまだが
ひでりあがりの　なめぐじら。」

走りながら廻りながら踊りながら、鹿はたびたび風のように進んで、手拭を角でついたり足でふんだりしました。嘉十の手拭はかあいそうに泥がついてところ

どころ穴さえあきました。

そこで鹿のめぐりはだんだんゆるやかになりました。

「おう、こんだ団子お食(く)ばがりだじょ。」

「おう、煮(に)だ団子だじょ。」

「おう、まん円(まる)けじょ。」

「おう、はんぐはぐ。」

「おう、すっこんすっこ。」

「おう、けっこ。」

鹿はそれからみんなばらばらになって、四方から栃のだんごを囲んで集まりました。

そしていちばんはじめに手拭に進んだ鹿から、一口

ずつ団子をたべました。六疋（ぴき）めの鹿は、やっと豆粒（まめつぶ）のくらいをたべただけです。
　鹿はそれからまた環（わ）になって、ぐるぐるぐるぐるめぐりあるきました。
　嘉十はもうあんまりよく鹿を見ましたので、じぶんまでが鹿のような気がして、いまにもとび出そうとしましたが、じぶんの大きな手がすぐ眼（め）にはいりましたので、やっぱりだめだとおもいながらまた息をこらしました。
　太陽はこのとき、ちょうどはんのきの梢（こずえ）の中ほどにかかって、少し黄いろにかがやいて居（お）りました。鹿

のめぐりはまただんだんゆるやかになって、たがいにせわしくうなずき合い、やがて一列に太陽に向いて、それを拝むようにしてまっすぐに立ったのでした。嘉十はもうほんとうに夢（ゆめ）のようにそれに見とれていたのです。

一ばん右はじにたった鹿が細い声でうたいました。

「はんの木（ぎ）の
みどりみじんの葉の向（もご）さ
じゃらんじゃららんの
お日さん懸（か）がる。」

その水晶（すいしょう）の笛（ふえ）のような声に、嘉十は目をつぶって

ふるえあがりました。右から二ばん目の鹿が、俄（にわ）かにとびあがって、それからからだを波のようにうねらせながら、みんなの間を縫（ぬ）ってはせまわり、たびたび太陽の方にあたまをさげました。それからじぶんのところに戻るやぴたりととまってうたいました。

「お日さんを
　せながさしょえば　はんの木（ぎ）も
　くだげで光る
　鉄のかんがみ。」

はあと嘉十もこっちでその立派な太陽とはんのきを拝みました。右から三ばん目の鹿は首をせわしくあげ

たり下げたりしてうたいました。

「お日さんは
はんの木（ぎ）の向（もご）さ、降りでても
すすぎ、ぎんがぎが
まぶしまんぶし。」

ほんとうにすすきはみんな、まっ白な火のように燃えたのです。

「ぎんがぎがの
すすぎの中（なが）さ立ちあがる
はんの木（ぎ）のすねの
長（な）んがい、かげぼうし。」

五番目の鹿がひくく首を垂れて、もうつぶやくようにうたいだしていました。

「ぎんがぎがの
すすぎの底(そこ)の日暮(ひぐ)れかだ
苔(こけ)の野はらを
蟻(あり)こも行がず。」

このとき鹿はみな首を垂れていましたが、六番目がにわかに首をりんとあげてうたいました。

「ぎんがぎがの
すすぎの底(そこ)でそっこりと
咲ぐうめばぢの

愛(え)どしおえどし。」

鹿はそれからみんな、みじかく笛のように鳴いてははねあがり、はげしくはげしくまわりました。

北から冷たい風が来て、ひゅうと鳴り、はんの木はほんとうに砕(くだ)けた鉄の鏡のようにかがやき、かちんかちんと葉と葉がすれあって音をたてたようにさえおもわれ、すすきの穂(ほ)までが鹿にまじって一しょにぐるぐるめぐっているように見えました。

嘉十はもうまったくじぶんと鹿とのちがいを忘れて、「ホウ、やれ、やれい。」と叫(さけ)びながらすすきのかげから飛び出しました。

鹿はおどろいて一度に竿（さお）のように立ちあがり、それからはやてに吹（ふ）かれた木の葉のように、からだを斜（なな）めにして逃（に）げ出しました。銀のすすきの波をわけ、かがやく夕陽（ゆうひ）の流れをみだしてはるかにはるかに遁（に）げて行き、そのとおったあとのすすきは静かな湖の水脈（みお）のようにいつまでもぎらぎら光って居りました。

そこで嘉十はちょっとにが笑いをしながら、泥のついて穴のあいた手拭（てぬぐい）をひろってじぶんもまた西の方へ歩きはじめたのです。

それから、そうそう、苔（こけ）の野原の夕陽の中で、わたくしはこのはなしをすきとおった秋の風から聞いたの

です。

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社
１９９０（平成２）年５月25日発行
１９９７（平成９）年５月10日17刷
初出：「イーハトヴ童話　注文の多い料理店」盛岡市杜陵出版部・東京光原社
１９２４（大正13）年12月１日
入力：土屋隆
校正：noriko saito
２００５年2月21日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。